

# 「習熟度別クラス編成」に関する一考察： 「外国語 コミュニケーション (英語)」における授業改善 A Study on Streaming Class: Towards Improvement of English Classes

岡部 幸枝      奥平 文子

## はじめに

大学生の学力低下が話題にされて久しい。18歳人口の減少や入学選抜制度の改変により、多様な学生が入学することになったところにもその一因があると言えよう。加えて英語は積み重ねの教科であり、中学校・高等学校段階で生徒の習熟の度合いが拡大し、大学入学時点では学力差のある学生を受け入れる傾向が強まっている。そのような学生の学力の実態に合った授業をきめ細かく効果的に展開するために、授業改善の一方法として「習熟度別クラス編成」が考えられる。

本学英語研究室では、平成13年度から、体育学部体育学科の選択(必修)科目「外国語コミュニケーション(英語)Ⅰ、Ⅱ」において「習熟度別クラス編成」の導入を試みた。

本稿では、まず「習熟度別クラス編成」の概念及びその実施状況について考察する。次に本学の授業における「習熟度別クラス編成」について、その導入の経緯と目的、クラス分けテスト結果からみる本学学生の英語学力の実情と授業内容、「習熟度別クラス編成」に関する指導教員と学生の意識調査及び成績評価の結果を分析する。最後に、本学の英語教育に関する今後の課題を整理し、さらなる授業改善を図ることを目的とする。

## Ⅰ 「習熟度別クラス(学級)編成」

### 1 概念

学校教育の中に「習熟度別クラス(学級)編成」という概念が初めて導入されたのは、昭和53(1978)年

改訂の高等学校学習指導要領である。総則の中で指導計画作成の配慮事項として、「指導に当たっては、生徒の学習内容の習熟の程度などに応じて弾力的な学級の編成」(文部省 1978:8)が述べられている。高度経済成長を受けて、高等学校進学者が急速に増大するにつれ、生徒の学力差が拡大し、それに応じた教育が行われる必要が生じたためと考えられる。

中学校においては、平成元(1989)年改訂の中学校学習指導要領において、個に応じた指導の工夫改善の一方法として「学習内容の習熟の程度に応じた指導」(文部省 a, 1989:5)という表現で指導計画作成の配慮すべき事項の中に記されている。ここでは差別意識に配慮した控えめな表現となっている。

また、大学においては、同じ概念であっても、「進度別クラス編成」、「学力別クラス編成」、「習熟度別クラス編成」、「レベル別クラス編成」などと呼称は異なっている。また、学生間に差別意識が生じないように配慮して固有のクラス名をつける等の工夫がみられる大学もある。以上のことから、大学の外国語教育においては、各大学及び担当教員によりクラス分けに対する解釈が若干異なることが分かる。即ち、「習熟度別クラス編成」に対して一致した見解は示されておらず、またその定義づけもなされていないのが現状であると言えよう。

## 2 「習熟度別クラス編成」の実施状況

公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査<sup>12)</sup>(文部科学省:平成15年5月1日)によると、中学校10,248校中「個に応じた指導」を実施している中学校は86.8%となっている。その指導内容を類型別にみると「理解や習熟の程度に応じた指導」(類型のア)は66.9%となっている。それを教科

別にみると外国語の指導においては、「理解や習熟の程度に応じた指導」(類型のア)の割合は第3学年でも6.5%に過ぎず、「課題別、興味・関心別の指導」(類型イ)の割合と比較して、高くはなっていない。外国語(英語)は中学校から始まる教科として、理解や習熟の度合いが指導困難に至るほど広がっているとは言えないことや習熟度別以外の方法で個に応じた指導を考える方向が選ばれていると言えよう。

高等学校においては、ホームルームのクラスがすでに英語学力別のクラス編成になっている一部の私立学校の場合を除けば、通常は英語の授業時間だけが「習熟度別クラス編成」で指導が行われる。さらによりきめ細かな指導を目指して、1クラスを2クラスに、2クラスを3クラスに編成して同時展開で授業を行うなど、少人数による「習熟度別クラス編成」を行っている場合が多くみられる。

平成元年度改訂の高等学校学習指導要領<sup>11)</sup>で「コミュニケーション能力の育成」が外国語科の目標として明記され、「オーラル・コミュニケーション」科目が3科目新設された。このことにより、「聞くこと」「話すこと」のコミュニケーション能力を充実させる言語活動の展開とその指導効果の向上を目指して、少人数クラス編成が採用される場合が多くみられた。しかし、学校をあげての「習熟度別クラス編成」の導入には、慎重な姿勢がみられる。「習熟度別クラス編成」実施には生徒、保護者、学内の教員の理解と協力を必要とすることはもとより、英語科教員の共通認識に基づく適切な教材選択、より公平な評価方法と評価基準の確立等が必要であり、当然のことながら準備と実施に多くの時間と労力を必要とするので、消極的な傾向がみられるものと考えられる。しかし、「習熟度別クラス編成」による指導に取り組んだ高等学校の報告によると、生徒、教師共に高い評価を下している<sup>13)</sup>。

大学における「習熟度別クラス編成」の状況は、大学英語教育学会実態調査委員会がまとめた調査報告書<sup>4)</sup>によると、有効回答のあった全国360の大学・短期大学の語学教育において、習熟度別クラス編成を「設定している」のは、34.4%である。その内訳は、習熟度別編成を「すべての授業において設定して

いる」学部・学科の割合が7.5%(27件/360)、「一部に設定している」割合が26.9%(97件/360)である。さらに、「今後行う予定である」との回答7.2%を加えると習熟度別クラス編成を視野にしている学部・学科の割合は全体の41.7%になる。このことから、各大学においては学生の学力差に合わせて、習熟度別クラス編成がかなり導入されていると言えよう。

大学の種類別では、すべての授業が習熟度別クラス編成で行われているのは、「女子4年制大学」が20.8%と最も多く、短期大学が最も少なく、70%の短期大学で実施されていない状況である。

学部・学科別の調査では、実施しているのは「国際・外国語学系」が69.4%と最も多く、「実施していない」学部・学科は「人間学系」(81.8%)、「医・歯学系」(79.3%)の割合が高くなっている。

英語の授業の中で、「読む」「書く」「聞く」「話す」の「技能別授業設定」をしている学部・学科が全体の59.4%にのぼるが、「国際・外国語系」では、技能別に「4技能すべて設定」している割合が69.4%と非常に高くなっている。さらにこれらの学部・学科では技能別授業と合わせて、習熟度別クラス編成を実施している割合も高い。「講読」の授業では、学生の個別の能力はそれほど指導に影響はないので、習熟度別クラス編成を行わない場合でも、個人差がより明確に出やすい「スピーキング」の授業では習熟度別クラスを取り入れているという学科もみられる。

言語の4技能には、多くの場合相関関係があり、英語力を総合的に考える場合には、4技能の有機的な統合力が必要である。しかし、学生の英語力を技能別にみると、リスニングの授業で上位の学生が必ずしもライティングの授業で上位であるとは限らない。また、その逆の場合もある。技能別に細かく習熟の度合いをはかり、それに応じてクラス編成をすることにより、学生の多様性にさらに応えることができると言えよう。このように、細かく焦点を絞って目的別に習熟度別クラス編成をすることは、効果的な方法であると考えられる。授業数も多く、英語力養成を主たる目的とする「外国語系」では、このような設定が可能となっていることは当然の結果であろう。他方

で、英語を専門としない学部・学科においては、授業数が限られていることもあり、技能別の「習熟度別クラス編成」の実施は難しい状況にあると考えられる。「習熟度別クラス編成」の利点は学生が自らの習熟度（レベル）に合わせた授業を受けることで、より学習効果をあげることができると考えられる。また、教員にとってもレベル差の少ない学生に合わせた授業展開ができるので、教えやすくなるであろう。しかし、一方では差別意識が生まれるのではないかという危惧があり、さらには各レベルを考えた上での総合的な成績評価が難しくなる側面もある。

しかしながら、大学生の学力低下問題が取り上げられるようになり、個に応じた指導の必要性がさらに求められる中で、より効果的な指導をする上でのクラス分けは、授業改善の要になる一つの方法と考えられる。

「習熟度別クラス編成」は多くの大学で取り入れられており、報告などもみられるが、それに関する総合的な研究は非常に少ないのが現状である。一例として鹿児島純心短期大学では、技能別授業編成の中で、「英作文」「英会話」のクラスを習熟度別にクラス編成しており、多角的な研究・調査<sup>6)</sup>が行われている。大学英語教育の改善のためにも、今後このような研究がさらに増えていくことが望まれる。

## II 本学における「習熟度別クラス編成」

### 1 本学学生の英語学力差の拡大傾向と外国語（英語）の教育課程上における位置づけの変遷

本学学生の英語学力差が拡大傾向にある要因の一つに、入学選考方法の多様化が考えられる。AO入試の導入や指定校推薦・スポーツ推薦などの推薦入試の拡大により、一般入試で教科（英語）を受験して入学する学生の割合が減少している。このことが学生の英語学力低下と多様化の要因になっていると考えられる。

平成15年10月現在の「外国語コミュニケーション（英語）Ⅱ」の受講学生373名（欠席者を除く）中、AO入試合格者は126名（33.8%）、推薦入試合格者

は190名（50.9%）、一般入試合格者は57名（15.3%）である。さらに習熟度別の所属クラスをみると、一般入試合格学生57名中40名（70.2%）は上位クラスに所属しているが、AO入試合格者126名中上位クラスの所属学生は34名（27.0%）であり、推薦入試合格学生190名中上位クラス所属学生は31名（16.3%）となっている。

このことから、本学においては一般入試合格学生の英語学力は比較的高いが、AO入試合格学生や推薦入試合格学生は、英語を苦手とする学生が多く英語学力が低い傾向にあると言えよう。学生の学力差に配慮した指導内容と指導方法の工夫が求められる所以である。

つぎに考えられることとして、外国語（英語）の教育課程上の位置づけの変更と教科時数の減少及び教科内容の変化があげられる<sup>5)</sup>。

平成3年の大学設置基準の大綱化により外国語は「外国語」の授業枠から「一般教育科目（専門以外の科目）」の枠に組替えられた。このことを受けて平成6（1994）年度の教育課程改訂により、外国語の履修は1外国語4単位のみ減少し、1年次における通年履修科目となった。前年度までの英語8単位（1、2年次4単位履修）、ドイツ語2単位必修であったことと比較すると大幅な減少である。これは必修最大12単位であった時代から考えると実に「最大単位時の三分の一の単位」（藤村学園創立100周年記念記録等作成委員会2002:98）に減少した。

さらに、「教育職員免許法」の改正（平成10年7月）により、平成12年度から「外国語コミュニケーション」が教育職員免許取得の必修科目となり、教科名が「英語」から「外国語コミュニケーション（英語）」と変更され、前期2単位、後期2単位の枠組みになった。教師は一斉指導に近い指導形態から、英語運用能力の伸長を図る個に応じた指導を進める必要が高まり、学生の英語学力差は授業のスムーズな進行にさらに支障をきたすところとなった。

このように、外国語（英語）の履修単位数の減少とともに、多様な選択講座の拡大<sup>8)</sup>により、大半の学生が1年次で英語の学習を終了するのが現状である。1年次の授業の中では、卒業後の進路に向けて、

英語をさらに必要とする学生の英語基礎力を補強し、学習の指針を与えることが現在大きな課題となっている。このことから「習熟度別クラス編成」の必要性が生じる所以があると言えよう。

## 2 「習熟度別クラス編成」の導入

### (1) 導入の経緯と目的

平成12年度から英語の専任教員が3名となった。受講学生は1クラス平均60名以上で80名近い人数のクラスもあった。この人数でコミュニケーションを重視した授業を90分実施することは困難を極めた。日を追って学生の緊張感が薄れてくるにつれて、英語学力の低い学生は学習意欲を極度に喪失し、そのような学生の意欲低下のみならず、クラス全体に意欲喪失の雰囲気を拡大し、学習集団の雰囲気の悪化につながった。英語に興味があり、学習意欲も強く、学力の高い学生をさらに伸ばしたり、学力はそれほど高くはないが、英語学習に興味・関心がある学生の意欲を引出し伸ばしたりすることに困難を生じた。学生の学力差によりクラスの授業運営に大きな支障をきたすところとなった。

英語の授業は専任教員3名による同時開講授業となっていたので、習熟度別クラス編成は技術的には可能であると考えて、その是非について検討した。その結果、平成12年9月教務課の協力を得て、次の目標の下に、習熟度別クラス編成を試行することにした。

- ① 高校レベルの英語基礎学力があり、学習意欲の高い学生の英語力を伸ばし、実力をつける。
- ② 英語学力の低い学生に、きめ細かい指導をゆっくり行うことにより、学習意欲の喪失を防ぎ、英語に対する新たな興味・関心を引き出す。
- ③ 本学学生の英語力の実態を把握し、英語担当教員の同一認識の下で指導にあたる。
- ④ 指導方法の改善・工夫に努めるとともに、学生の実態に合った教材開発に努める。
- ⑤ 学生の英語学習に対する興味と関心の持続を図る。併せて留学希望学生の学力養成を支援する。

### (2) クラス分けテストと成績分布

クラス編成にあたり、クラス分け資料として、高等学校1学年修了程度の問題を作成し使用した。英語研究室独自の試みであるために、予算の関係もあり、正式なテスト ITP (Institutional Testing Program) は使用できなかった。

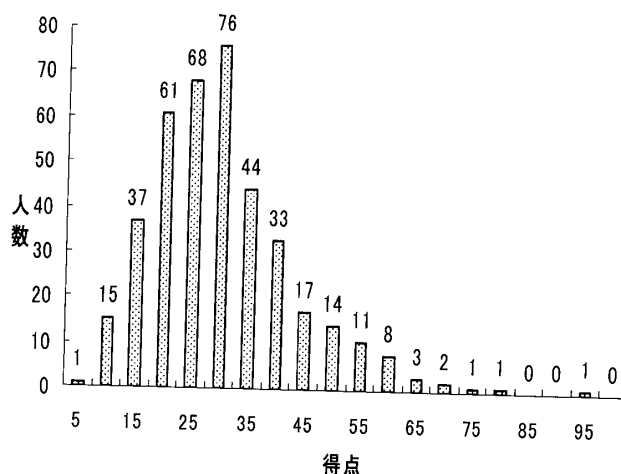


図1 平成13年度 クラス分けテスト成績分布

平成13年度の成績分布状況を見ると、受験者393名中30点以下の学生が258名(65.6%)と圧倒的に多く、60点以上の学生は16名(4.1%)である。中間に位置する学生は119名(30.3%)である。得点は最高得点91点(1名)最低点4点(1名)で、10点以下の学生12名であり、平均28.2点となっている。この結果から、高等学校1学年修了程度の英語の実力がついていない学生が大半であると言える。またこのテスト結果で習熟度別クラスを編成することに妥当性があるかどうかは疑問であったが、次年度試験問題を改善することにして、この結果を習熟度別3クラス編成の基礎資料とした。

平成14年度及び15年度は読解問題を中学校修了程度の問題として、入学後の学習内容を考えてリスニング問題を追加した。

平成14年度の成績分布状況を見ると、受験者350名中、30点以下の学生は111名(31.7%)、60点以上の学生は88名(25.1%)である。その中間に位置する学生は151名(43.2%)となり、前年度と比較すると、分布状況がなだらかになっている。最高点93点(1名)から最低点9点(2名)の開きとなっている。

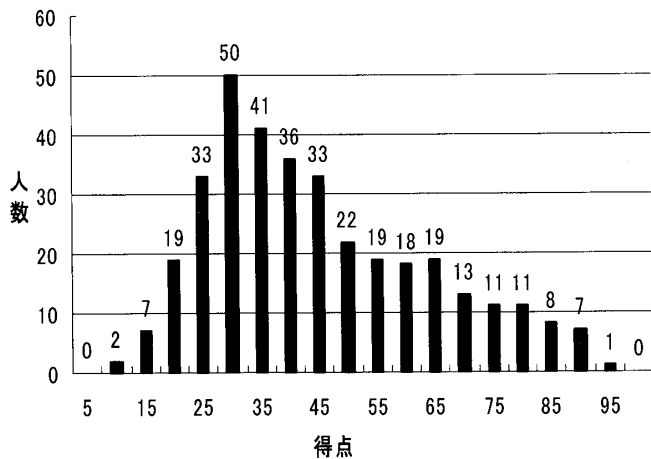


図2 平成14年度 クラス分けテスト成績分布

平成14年度は、英語受講学生が前年度比で50名近い減少となった。第1学年(新入学生)の外国語別選択受講学生の割合を比較すると、英語選択学生は平成14年度310名(73.8%)で、13年度354名(89.2%)より44名(15.4%)の減少となっているが、ドイツ語選択学生は平成13年度の31名(7.8%)から、平成14年度84名(20.0%)となり、53名(12.2%)の増となっている。フランス語選択学生も平成14年度は13年度の12名(3.0%)から26名(6.2%)となり、13名(3.2%)の増となっている。

これは、習熟度別クラス編成を敬遠してドイツ語、フランス語の選択に回った学生が多かったものと考えられる。

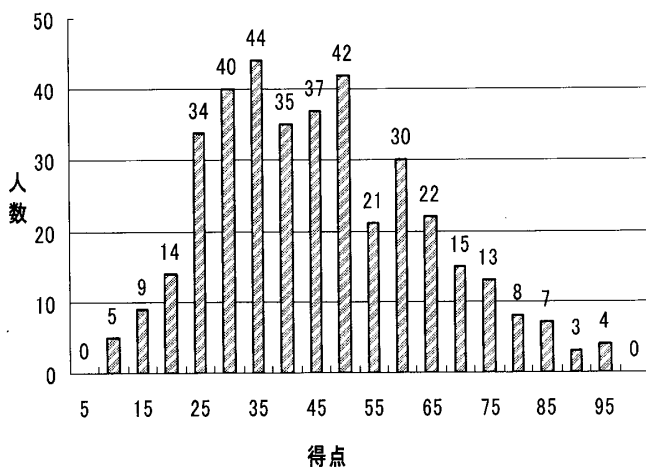


図3 平成15年度 クラス分けテスト成績分布

しかし、平成15年度になると、英語選択学生は379名となった。これは、第1学年外国語受講学生総数413名の91.8%であり、ドイツ語受講学生19名(4.6%)、フランス語受講学生15名(3.6%)と比較して大幅に増え、過去5年間で最大の割合となった。このことから「習熟度別クラス編成」に対する学生の抵抗感は薄れ、きめ細かい指導についての理解が進んだものと考えられる。

成績分布をみると、受験学生383名中30点以下の学生102名(26.6%)、60点以上の学生102名(26.6%)、その中間に位置する学生は179名(46.7%)である。最高点95点(1名)から最低点6点(1名)の開きで10点以下の学生5名となっている。

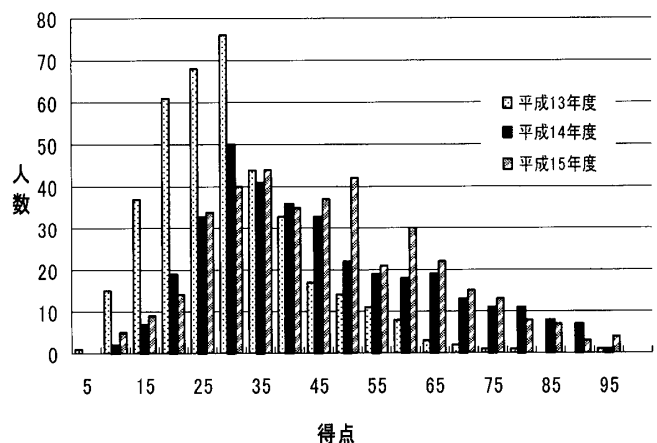


図4 平成13から15年度 クラス分けテスト成績分布

3年間の得点別人数の分布を比較すると、平成13年度は問題が難しく30点以下の学生が極端に多い。平成14年度と15年度は同一問題であり、上位学生の割合はそれほど変わらないが、15年度は50点～60点台の学生の割合が高くなっている。15年度に英語受講学生が増大したことも関連していると言えよう。

なお、今回のテスト問題の構成はリスニング、総合読解問題及び部分英作文(文法問題)となっているが、問題別に得点を見ると、英作文の問題が特に点数が低い。これは英文の構成力が身に付いていない学生が多いことを示している。また簡単な英単語の綴りが正しく書けない学生も多くみられた。

以上のことから、学生全体の英語力を平均してみると、大体中学校卒業程度と考えられる。個別に細かく見ていくと、高等学校卒業程度の英語力を有する学生が数名、中学1年程度の英語力もない学生が数名といえるであろう。

### (3) クラス担当者と使用教材

平成12年度、専任教員3名の合議により、13年度のクラス担当者を決めた。教材については、当分の間担当者に任せることとした。いずれも市販教材である。

「外国語コミュニケーション(英語)Ⅰ、Ⅱ」の到達

	クラス	使用教科書
A B	上位クラス	SPECTRUM VIDEO(Prentice Hall) A World in common(三修社)
	中位クラス	Impact Listening 1(Longman) BODY MACHINE(英潮社)
	下位クラス	Impact Grammar(Longman)

表1 平成13年度「外国語コミュニケーションⅠ、Ⅱ」  
使用教科書一覧

	クラス	使用教科書
A	上位クラス	New Headway English Course(Oxford) Reading Communicator(SANSHUSHA)
	中位クラス	America - Cultural Insights(金星堂) American - Homestay Do's&Don'ts(南雲堂)
	下位クラス	前期: SIDE by SIDE VIDEO WORKBOOK 1A(Prentice Hall) 後期: SIDE by SIDE VIDEO WORKBOOK 1B(Prentice Hall)
B	上位クラス	Impact ISSUES(Longman) ACTIVATOR: Building confidence in Communication
	中位クラス	America - Cultural Insights(金星堂) American - Homestay Do's&Don'ts(南雲堂)
	下位クラス	前期: SIDE by SIDE VIDEO WORKBOOK 1A(Prentice Hall) 後期: SIDE by SIDE VIDEO WORKBOOK 1B(Prentice Hall)

表2 平成14年度「外国語コミュニケーションⅠ、Ⅱ」  
使用教科書一覧

	クラス	使用教科書
A	上位クラス	Impact ISSUES(Longman) Successful Steps for the TOEIC test(SEIBIDO)
	中位クラス	Viva! San Francisco - Video Approach to Survival English Environment and Health(環境と健康)(成美堂)
	下位クラス	前期: SIDE by SIDE VIDEO WORKBOOK 1A(Prentice Hall) 後期: SIDE by SIDE VIDEO WORKBOOK 1B(Prentice Hall)
B	上位クラス	Impact ISSUES(Longman) SPECTRUM VIDEO(Prentice Hall)
	中位クラス	Viva! San Francisco - Video Approach to Survival English Environment and Health(環境と健康)(成美堂)
	下位クラス	前期: SIDE by SIDE VIDEO WORKBOOK 1A(Prentice Hall) 後期: SIDE by SIDE VIDEO WORKBOOK 1B(Prentice Hall)

表3 平成15年度「外国語コミュニケーションⅠ、Ⅱ」  
使用教科書一覧

目標や習熟度別に編成したそれぞれのクラスの到達目標を具体的に設定していない中での教材選択であるので、担当者の主体性を尊重して、なるべく、生徒の英語力、興味・関心の実態に合わせて、担当者が指導しやすい教材選択となっている。

平成14年度から専任教員が1名減の2名となったので、非常勤講師に中位2クラスの担当を依頼した。専任教員2名は上位クラスと下位クラスをそれぞれ1クラスずつ担当し、下位クラスについては、同じ教材を使用した。上位クラスについては、異なる教材とした。

学生に実施したアンケート調査(後述)の中で、担当者によって使用教材に大きな違いがあり、クラスによって教材費が違いすぎると指摘があったので、平成15年度は担当者が異なる上位2クラスのテキストのうち1冊を同じ教材とした。

今後は「外国語コミュニケーション(英語)」の教科としての統一目標及び、履修最低基準項目を設定した上での教材選択の検討が必要であると考えている。

### (4) 習熟度別クラスに対する反応

平成13年度は導入初年度なので、各担当クラスの指導教員が前年度と比較して感じた授業の進行具合、学生の反応、指導内容について、意見交換したものをまとめた。

#### ①平成13年度習熟度別クラス編成に対する担当教員の反応

A 上位クラス担当者：上のクラスになったことが学生の自信になっているようである。非常に意欲的である。課題に積極的に取組み、質問も多い。私語がほとんどない。全体的にモチベーション(motivation)が高い。

B 中位クラス担当者：授業への参加態度が良い。意欲的であり、よく質問をする学生が授業にメリハリをつけている。中間クラスは学力的に一番均質に近いのか、極度の緊張感はなく、リラックスしている。騒がしいと注意することもないが、静か過ぎて眠る学生もいる。

C 下位クラス担当者：学習意欲の低い学生が多く、授業中眠る学生がみられる。注意すれば、居眠りやお喋りを止め

るので、学習態度に大きな問題がある学生はいない。ただ、アルファベットでさえ不安な学生も若干いるので、中学校程度の内容からじっくり復習させていきたい。特別できる学生がいないので、時間をかけてじっくりと説明して、進むことができる点が良い。

②習熟度別クラス編成に対する学生の反応

平成 14、15年度は、習熟度別クラス編成に関する学生の反応を見るためにアンケート調査を実施した。「賛成」、「どちらかという賛成」、「どちらかという反対」、「反対」の4つの選択肢から選ばせた。また、その理由を自由に記述させた。

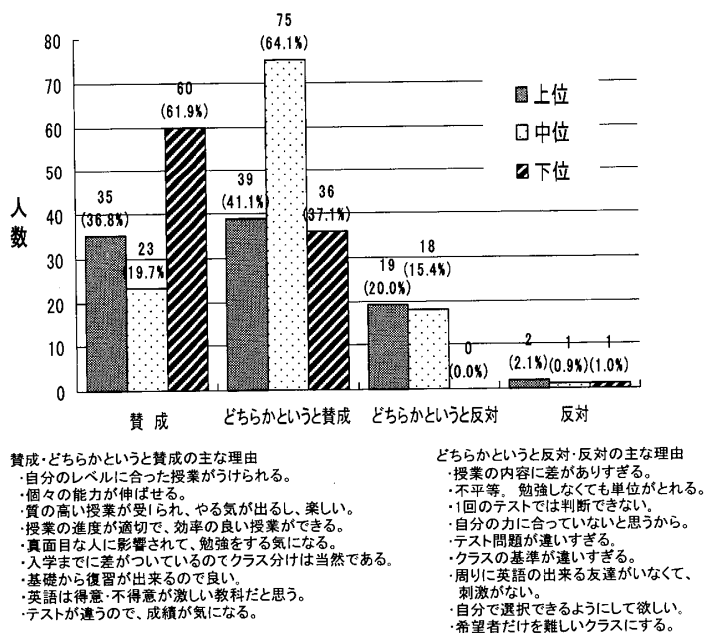


図5 平成14年度 クラス分けに関する意識調査

平成14年度の集計結果をみると、欠席者を除く回答者309名中、「賛成」118名(38.2%)、「どちらかという賛成」150名(48.5%)で、両方合わせると268名(86.7%)となり、大多数の学生が賛成していると考えられる。

「反対」は4名(1.3%)、「どちらかという反対」37名(12.0%)で、両方を合わせると41名(13.3%)

で、反対者の割合は少ないと考えられる。

その内訳をみると、「賛成」の数は、下位クラス60名(61.9%)、上位クラス35名(36.8%)、中位クラス23名(19.7%)の順であるが、「どちらかという賛成」を加えると下位クラス96名(99.0%)中位クラス98名(83.8%)上位クラス74名(77.9%)となり、下位クラスほど賛成の割合が高い傾向がみられる。

逆に「反対」の数は上位クラスでは2名(2.1%)、中位クラスでは1名(0.9%)、下位クラスでは1名(1.0%)であるが、「どちらかという反対」を加えると上位クラスでは21名(22.1%)、中位クラスでは19名(16.3%)、下位クラスでは1名(1.0%)となり上位クラスほど反対の割合が高い傾向がみられる。

これは下位クラスでは習熟度がほとんど同程度となっているが、上位クラスでは、クラス内の学生に習熟度に関わりがあり、その結果上位クラスの中で下位レベルの学生は反対する傾向があるものとうかがえる。

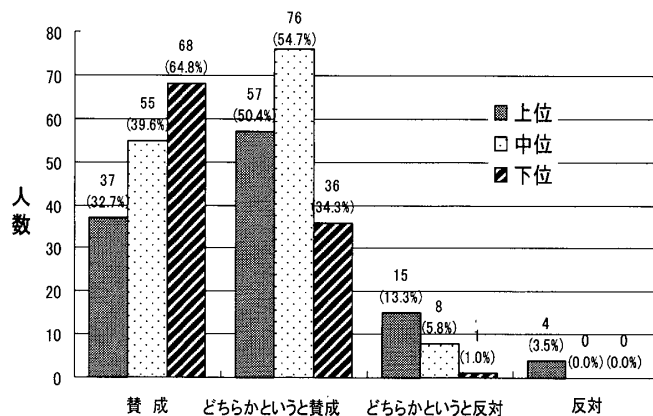


図6 平成15年度 クラス分けに関する意識調査

平成15年度の調査結果をみると、この傾向は更に強く回答者357名中、「賛成」160名(44.8%)と「どちらか」として「賛成」169名(47.3%)を合わせると357名中329名(92.1%)が賛成という結果となり、ほとんどの学生が満足していると考えられる。また、「反対」4名(1.1%)と「どちらか」として「反対」24名(6.7%)を合わせた数は28名(7.8%)で1割以下であり、反対の学生の割合は低いと言える。各クラスによる傾向は14年度とほぼ同じ傾向である。

15年度に賛成の割合がさらに増え、反対の割合が減ったのは、年度当初に学生に所属希望クラスを書かせ、一部学生のクラス変更希望の申し出に応じたこともその一因と考えられる。

以上のことから「習熟度別クラス編成」に対する反応は授業担当教員も受講学生もともに満足度が高く肯定的であると言えよう。当初設定した主要目的の①学習意欲の高い学生の英語力を伸ばす ②英語学力の低い学生に、きめ細かい指導をゆっくり行い、学習意欲の喪失を防ぐ ③学生の英語力の実態を把握し、英語教員の共通認識の下で指導にあたることはほぼ達成されている。しかし、現在のクラス分けの方法や人数配分が妥当かどうか検討の余地もある。また、クラス分けテストにおいて、英語力をどの観点からはかるか、またどのようなテストを用いるかということもさらに検討を要する。

(5) 成績評価

学生に対する成績評価は原則として担当教員の裁量に任されているが、習熟度別にクラスが編成されているので、学生がそれによって不利にならないように配慮している。特に上位クラスの場合は、下位クラスに入れば当然「優」がもたらした筈であるという結果にならないよう、「優」の割合を多くするようにした。出席状況、授業への参加状況、課題及びテストの点数等で総合的に評価することと、教科の性格上出席については、担当教員で厳しい規準を確認している。総合成績評価に関してはゆるやかな目安として次の申し合わせをした。

上位クラス：「優」を基準として特に成績の良い学生は「秀」、少し劣る学生は「良」とする。特別な場合は、「可」の可能性がないわけではない。目安として、「秀」は15%を上限とする。「良」についても、15%程度とする。

中位クラス：「良」を基準として、成績の良い学生は「優」、少し劣る学生は「可」とする。目安として、「優」と「可」は20%程度とする。努力の成果が著しく見られる学生には、「秀」をつけることも可能である。

下位クラス：「良」と「可」を基準とする。「良」と「可」の割合は「良」を多く(40~50%の範囲)として、「可」は(20~30%)を目安とする。「優」は15%を限度とする。

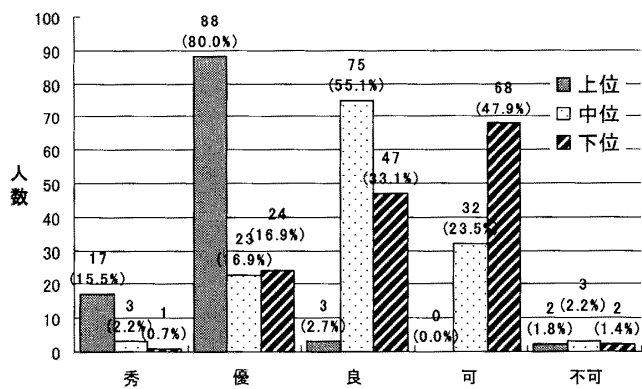


図7 平成13年度 外国語コミュニケーションⅠ(英語) 成績評価分布

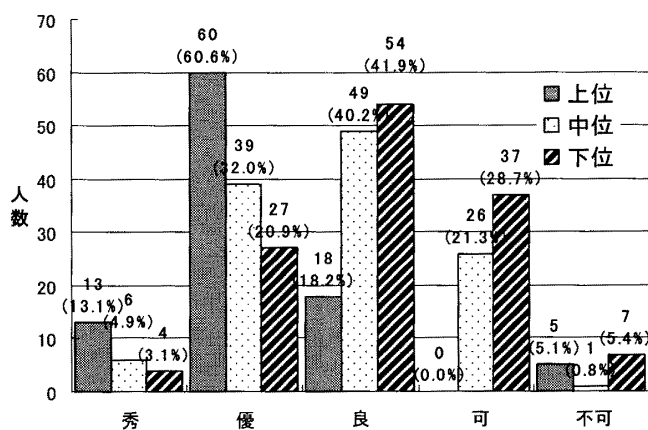


図8 平成13年度 外国語コミュニケーションⅡ(英語) 成績評価分布



「外国語 コミュニケーション (英語)」における授業改善

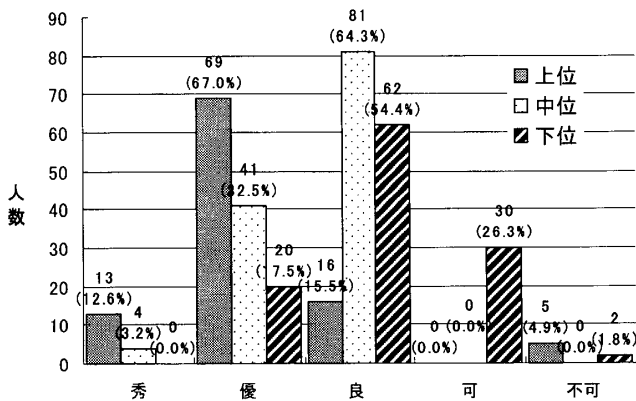


図9 平成14年度 外国語コミュニケーションⅠ (英語) 成績評価分布

成績評価の結果は、担当教員により、また年度によって多少の差はあるが当初の申し合わせに基づいて評価されている。全体を平均してみると、「秀」は全体の5～7%で下位クラスには該当学生はほとんどいない。「優」は全体の35～37%、「良」は35～45%程度、「可」は10～15%の割合となっている。

以上のことから入学時のクラス分けテストの成績分布と比較すると成績評価の分布に違いがあるが、大学での学習内容の到達度評価という観点から考えると当然の結果と言えるであろう。成績評価は授業担当者が大学の評価基準を考慮して作成したテストの結果と、出席状況、授業への参加状況、課題提出の状況などを総合的に評価した結果である。しかし、全クラス統一問題によるテストは実施していないので、評価が公平だとは言いがたい面があると考えている。「習熟度別クラス編成」を実施する際の統一評価「規準」と各クラス内での評価「基準」については、今後さらなる検討が必要である。

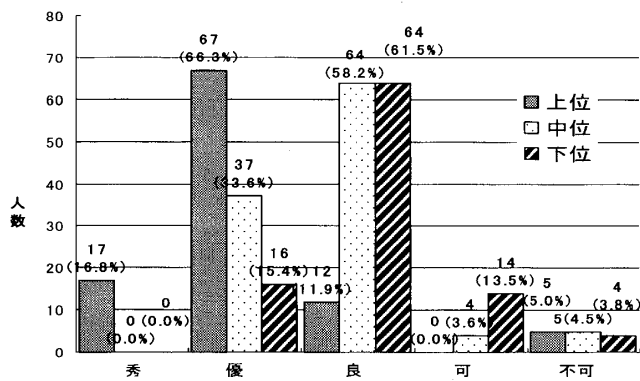


図10 平成14年度 外国語コミュニケーションⅡ (英語) 成績評価分布

おわりに

「習熟度別クラス編成」をより効果的に実施するために、本学における英語教育の方向性についても緻密な議論が必要であることを付け加えておく。つまり、「外国語コミュニケーション(英語)」の授業内容の重点をどこに置くかという問題である。「コミュニケーション」とは、日常生活における話し言葉のみを指すのではなく、書き言葉や非言語(ノンバーバル・コミュニケーション)をも含めた幅広い人間の知覚・感情や思考の伝達を包括するものである。そこで、英語教育をより効果的に展開するために、少ない時間数の中で、何を目標とし、到達点をどこに置くかを検討し、共通認識を図る必要がある。

中学校及び高等学校までの学習を確実にするための授業にするのか、或いは生活の場面に応じた「生活言語」を主とした英会話にするのかによってもその授業内容や方法は異なる。さらに、体育や児童教育等の特定の専門領域を学ぶ為に、語学教育をEAP (English for Academic Purposes) のような教育にするのかによっても指導内容が異なる。EAPは、「アカデミ

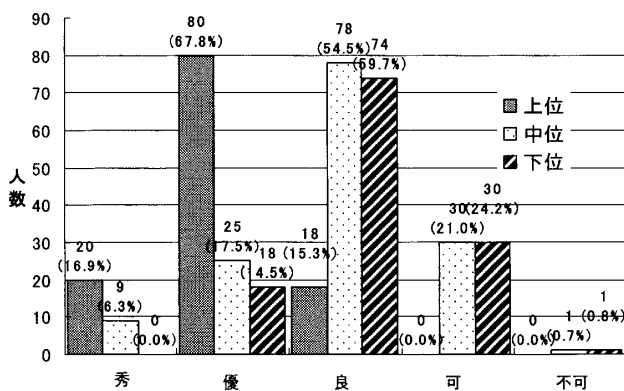


図11 平成15年度 外国語コミュニケーションⅠ (英語) 成績評価分布

先述のようなゆるやかな目安を基に、指導担当教員が目標とする授業内容に基づいて、評価した成績分布が図7から図11である。

ック・スキルズ」に主眼を置いたものであり、英語によるディスカッションやディベートの仕方、論文の書き方等を身につけさせることを目標とするものであるが、英語の基礎力がない学生には厳しい。また、英語を通して世界の問題を教えるというような、技能よりむしろ内容重視のアプローチ、或いは就職を視野に入れ、TOEICや英語検定などの資格取得を目的とする授業を行うことも可能であろう。また、「教養」としての英語を目指し、幅広いジャンルの文章を読ませる方向性も考えられる。

現在、グローバルレベルで急速に英語の普及が進んでいる。それに伴い地域性が英語に反映され、「英語」そのものの多様化が進んでいる。このような状況を勘案すると、日本人として、また、体育大生としてどのような「英語」をどのレベルまで身につけさせるべきかという議論もなされるべきであろう。加えて本学教育全体の中で英語教育のあり方を吟味し、様々な方策を立て、授業改善を図ることが今後なお一層求められる。

## 引用・参考文献

- (1) 大阪女学院短期大学 (1998) : 『自己点検誌』 pp.39-41.
- (2) 関口一郎 (1993) : 『慶應湘南藤沢キャンパス・外国語教育への挑戦』、三修社 pp.41-57.
- (3) 大学英語教育内英語教育実態調査研究会編 (1993) : 『21世紀に向けての英語教育』、大修館書店 pp.63-69.
- (4) 大学英語教育学会実態調査委員会 (2002) : 『わが国の外国語・英語教育に関する実態の総合的研究—大学の学部・学科編』 pp.33-36.
- (5) 田中慎也 (1994) : 『どこへ行く? 大学の外国語教育』、三修社 pp.69-80
- (6) 田原良子・堀江美智代・竹内光悦 (2001) : 習熟度別クラス編成に関する考察(1)、鹿児島純心女子短期大学紀要第31号 pp.215-233.
- (7) 鳥飼玖美子・速藤久美子編著 (1996) : 『大学英語教育の改革』、三修社 pp.108-111.
- (8) 藤村学園創立100周年記念記録等作成実行委員会編 (2002) : 『藤村学園100年のあゆみ』、学校法人藤村学園 p.98/pp.90-118.
- (9) 文部省 (1978) : 『高等学校学習指導要領』 p.8
- (10) 文部省 a (1989) : 『中学校学習指導要領』 p.5
- (11) 文部省 b (1989) : 『高等学校学習指導要領』 pp.108-118.
- (12) 文部科学省 (2003) : 公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査 pp.10-19
- (13) 渡辺かおり (1995) : 平成7年度習熟度別展開授業を行って、東京都立清瀬高等学校紀要19号 pp.4-12